特集 自分らしい弔い（とむらい）
～アイレック「終活」講座から～

「死ぬ準備が万全」という方はあまりいないでしょう。死に方や時期は誰にも分かりません。でもその時は必ず来か。それを人任せにして良いのでしょうか。清瀬市男女共同参画センター（アイレック）の男性サポーターチーム企活」（講師:井上治代さん）が8月に行われました。「終活」とは、人生の最期を考えることを通じて“自分”を見つめ、の特集では実施された「終活」講座から、葬送分野の歴史や時代背景を学び、終活の必要性を考えてみました。「元楽しくなる」と講師の井上さん。習慣や慣習にとらわれない葬儀や墓の形態が増えているなかで、自分にあった自

井上さんの講座から〈1〉

日本の葬送の歴史

源流から日本型仏教葬儀の形成

仏教発祥の地インドでは、人が亡くなって49日で葬儀は終了。中国では三回忌までです。

日本では江戸時代に幕府がすべての人々を仏教徒にしようとしますが現在の葬送の形態は長い歴史の中のほんの一部と言えます。

民間信仰と仏教

かつての日本の荘園制のもとで搾取されていた農民は、代々家を守っていくというような家意識やご先祖様を守るという考え方は持つ余裕もありませんでした。

それが、応仁の乱（1467～77）という10年も続いた争乱が終わると、荘園制は崩れ、農民たちの自治的な村ができてきました。そのころ仏教の僧侶は日本中を布教のために歩き始め、それまでは貴族や武士など一部の人に限られていた仏教が、ご先祖様を大切にしたい農民の気持ちと重なりました。先祖の供養のために、僧侶に自分の村にとどまって欲しいと、生活必需品を供給し、僧侶の居場所をつくり維持費を負担するようになり、寺や檀家制度のもとが形成されていったのです。

庶民が今のような墓石を建てた墓をつくるようになったのは、江戸中期以降のことで、それまでは遺体を放置した遺体遺棄葬が一般的でした。芥川龍之介の『羅生門』は『今昔物語集』の「羅城門」を踏まえたものですが、その門に遺体が捨られている様子が描かれています。京都の嵐山のあだし野は、遺体の捨て場でした。墓に埋葬するよりも、自然にかえすという考え方が一般的でした。

住民管理のツールとしての寺

江戸幕府は、政策として檀家制度を利用するようになります。当時、キリスト教が流行し始め「神」に権威を置くこの宗教を皆が信じたら政府が転覆するのではないかと怖れ「宗旨人別帳」を作り、全員を寺に所属させるようになりました。これが、現在の戸籍のような役割の始まりでした。この制度により政府は、徴兵や税金の取立てが容易になりました。国家が日本の隅々の民を把握できるようになったのです。

戸籍と家制度

次の明治政府は、将軍を中心とした幕藩政治から、天皇を中心にした近代国家をめざしました。その中で、神道国教化政策をとろうと試みます。明治政府は宗旨人別帳の機能は残し、江戸幕府の息がかかった仏教は排除したかったのです。そこで廃仏毀釈をすすめ、宗教色なしの壬申戸籍が生まれました。はじめて庶民に苗字がつくようになったのです。

今でも残っている江戸時代の墓石を見ると、上の方には仏の教えを表す「梵字」が彫られ、中心部分には「戒名」で個人名が刻まれていましたが、民法で家制度が確立されると「家紋」「家名」に変化していきました。

大正から昭和にかけて、戦争教育により国家と家への「忠孝」が強調される時代がありました。戦後、一人ひとりの基本的人権と男女平等を基本とする社会がつくられていきます。ところが葬送分野には、結婚したなら「夫の姓になり、守るべきは夫の家、夫の墓たるべし」という伝統的な過去の「家」の文化が色濃く残されてきました。最近では、核家族化が進み、単独世帯や夫婦のみの世帯が増加し、墓の後継者がいないという事態が起きています。

近年、葬送分野に関して人々の関心が高まってきたのは、これまで家のシンボルだった「墓」に自分たちの人生を合わせた生き方から、「家」より個人の生き方を大事に考えるようになったからと言えるでしょう。（筑紫）